

至元六年フビライ詔書中の譯寫一切文字について

吉池孝一

1. はじめに

パスパ文字はフビライの命のもとチベット僧パスパによって作られたものとされる。この文字につき、『元史』列伝の卷第八十九“釋老”に引用する至元六年のフビライの詔には次のようにある。

朕惟字以書言，言以紀事，此古今之通制。我國家肇其朔方，俗尚簡古，未遑制作，凡施用文字，因用漢楷及畏吾字，以達本朝之言。考諸遼金，以及遐方諸國，例各有字，今文治寢興，而字書有闕，於一代制度，寔爲未備。故特命國師八思巴創爲蒙古新字，譯寫一切文字，期於順言達事而已。自今以往，凡有璽書頒降者，並用蒙古新字，仍各以其國字副之。

朕惟(おも)うに、字は言を書し、言は事を紀す。これ古今の通制なり。我が国家 朔方に基礎を確立してより、その風俗は簡潔古雅をとるとび、いまだ文字の制作にいとまあらず。およそ施用の文字は、漢字および畏吾(ウイグル)字を用い、よつて本朝の言語を表達しきたる。これを遼・金および遠方の諸国に考うるに、おおむね各国文字を有す。いま我が国の文治ようやく興り、しかも字書を缺くは、一代の制においてまことに不備なりとせり。故に特に国師八思巴に命じて始めて蒙古新字を制作せしめ、一切の文字を訳写せしむ。順言達事を期せんとするのみ。自今以往、璽書の發布するものみな蒙古新字を用い、かさねて各々その国字をもつてこれにそえよ。¹

ここに言う“譯寫一切文字(一切の文字を訳写する)”の意味を理解することはそれほど容易ではない。諸言語(モンゴル語、漢語、チベット語、サンスクリット語、ウイグル語など)をパスパ文字で表音的に綴ると解す向きもあるようだが、果たしてそれでよいものかどうか。この点につき、先ずはこれまでどのように理解されてきたかということを代表的な文献で確認する。

2. 諸文献

Poppe1957の当該漢文の英訳は以下の通り。

We therefore especially command the National Preceptor, *Pa-ssu-pa*[八思巴 i.e., hP'ags-pa], to create a new Mongolian script, and to transcribe into it all writings.(p.5)

これは漢文を直訳したもので、全ての著作物(all writings)をパスパ文字に書き換えることを命じたとする。

¹ 訳文は野上 1978 による。

次にこの部分に直接関係するわけではないが、Poppe1957の中からやや関係のある記述を引用する。

The hp'ags-pa script in Chinese sources is called by the term 蒙古新字 *meng-ku hsin-tzu*, “Mongolian new script”, 蒙古字 *meng-ku tzu*, “Mongolian script” and 國字 *kuo-tzu*, “national script”, in distinction to the Uigur, which is called 畏兀字 *wei-wu tzu*. Although the terms are employed without distinction, one may presume that the term *kuo-tzu* “national script”, contains an indication of the nation-wide character of the new script, designed to be the script not only of the Mongols, but of all the nationalities of the Yüan empire. (p.5)

パスパ文字を“國字”とも称するわけであるが、この呼称はパスパ文字がモンゴル人のためだけでなく、元朝統治下の全民族のためのものであることを含意するのであろうと述べる。これは“譯寫一切文字（一切の文字を訳写せしむ）”を直接解説したものではないが、互いに関連しあった記述とみてよい。いずれにしても、Poppe1957の表現は慎重であり、パスパ文字はモンゴル語だけでなく元朝下の様々な言語を表記するために作られたなどとは述べていない。しかしながら、そのような誤解を与えかねない表現となっている。

羅常培・蔡美彪1959には次のようにある。

這個詔書裏特別應該注意的是：‘譯寫一切文字’這句話。有人因受到材料上的限制，曾誤以為這種字只是古代的蒙文，只用來寫蒙語，僅初期曾譯寫漢語，這種理解顯然是不合事實的。我們現在不單是還保存着八思巴字寫蒙語的很多史料，並且有元一代自世祖忽必烈至順帝帖木爾歷朝譯寫漢語的八思巴字史料，也非常豐富。此外現存史料中也還有一些是用八思巴字來譯寫梵語藏語等佛教經典的。可見當時八思巴字的應用，確實如頒行詔中所說‘譯寫一切文字’這只要結合現存史料把這句話細加玩味，便很容易明瞭。(10頁)

パスパ文字で書かれたモンゴル語・漢語・サンスクリット語・チベット語の史料が実在することよりみて‘一切文字’とは諸言語もしくは諸言語の文書を指すとする。なお、上に引用した解説文中の‘譯寫’という語の用法についてであるが、対象がモンゴル語のときは‘寫’とし、対象がモンゴル語以外の諸言語であるばあい‘譯寫’とする。主体者の言語であるモンゴル語を‘譯寫’の対象とするのは憚られるという語感によるのであろう。もっとも、言語を‘譯寫’するのか、それとも文書を‘譯寫’するのかという区別については考慮されていないようにみえる。

照那斯图1980には次のようにある。

詔書里說八思巴字的用途是“譯寫一切文字”。這句話清楚地表明了八思巴字是一種特殊的文字。我們知道，一般的文字只記錄特定的語言，是特定語言的符号系統，但八思巴字却是用來“譯寫一切文字”的，是用于多種語言的符号系統。現存八思巴字資料證明，當年用八思巴字譯寫的語言有蒙古語、漢語、藏語、梵語、維吾爾語以及其它目前還不能確定的語言。從八思巴字的字母表和拼寫法看，八思巴所設計的新文字反映了忽必烈在詔書里所說

的“譯寫一切文字”的要求。八思巴字的字母總數比其譯寫的每種語言所需用的都要多一些，而且往往還用特定的字母組合來表示特定的語言。因此，它的字母表具有適應多種語言的能力。制訂八思巴字拼寫法時，顯然也考慮了不同的語言對象，並且在這些語言之間作了一定的平衡、折中，在一定的內容上各有適當的照顧。例如，八思巴字的行款和書寫單位的確定，就是明顯的例証。八思巴字的行款是從左方起，自上而下直寫，書寫單位是音節。顯然，行款是順從了来源于“畏吾字”的回鶻式蒙古文的習慣，既不同于作為八思巴字字母基礎的藏文，也不同于八思巴字所拼寫的一個主要對象——漢文；然而，書寫單位却沿用了藏文的傳統，並且也與漢字的書寫單位相吻合。(37-38頁)

これによると、羅常培・蔡美彪1959と同様に、パスパ文字で書かれた諸言語（モンゴル語、漢語、チベット語、サンスクリット語、ウイグル語など）の史料が実在することよりみて‘一切文字’を諸言語もしくは諸言語の文書を指すとする。言語を‘譯寫’するのか、それとも文書を‘譯寫’するのかという区別については言及されない。総じて、“譯寫一切文字”を、諸言語をパスパ文字で表音的に綴ると解しているようにみえる。

照那斯圖・楊耐1987はフビライの詔を挙げその後で次のようにある。

很明显，蒙古皇帝是想用這種特制的新文字來取代原先使用的畏吾爾字和漢字，並用它來拼寫全國境內各民族的語言。(1頁)

この一文の表現は比較的明瞭である。モンゴルの支配者は、境内の諸民族語を、パスパ文字を用いて表音的に綴る事を意図したとする。

以上みてきたところによると、総じて、‘譯寫’とは何か、‘譯寫’の対象は言語であるのかそれとも文書であるのか、ということについてはそれほど議論の対象とはなっていないようにみえる。どちらかと言えば、パスパ文字は元朝統治下の諸言語を記すため作られたとの印象を与えるものとなっていると言えよう。このような論調の影響は小さくないと思う。それというのも、やや系統の異なる文献であるが、姜信沆1993はパスパ文字作成の目的の一つとして「元帝国版図内のあらゆる言語の適切な表記」(31頁)を挙げる。

これらの論調に対して、これから紹介するCoblin2007はやや趣を異にする。Coblin2007における“譯寫一切文字”の英訳と解説には次のようにある。

- ・“譯寫一切文字”を含む部分の英訳

Wherefore, we specifically command the National Preceptor, 'Phags-pa, to create a new Mongolian script, in order to transcribe all writing systems, our expectation being simply to facilitate smooth communication. From this time forward, whatever documents are issued under the Imperial Seal are to use the new Mongolian script, with the national writing of each [other] country alongside. (p.2)

- ・フビライの詔に対する解説の一部

From this passage several significant points emerge. At the outset it becomes clear that the new

writing was to be first and foremost a “Mongolian script,” i.e., a national writing system for Mongolian, such as the Khitans and Jurchens, also non-Sinitic peoples who had conquered China, had possessed for their own languages. It therefore seems probable that the writing of Mongolian was the first problem the 'Phags-pa Lama had to address in his orthography project. However, the new script was also to be used to “transcribe” (yixiě 譯寫) other scripts. This did not simply mean that these materials were to be translated into 'Phags-pa Mongolian. Rather, it was specifically stipulated that the new forms should appear beside native written forms of languages other than Mongolian and should thus phonetically transcribe those languages in the new system. (p.2) [下線はともに吉池による]

以上Coblin2007が述べることを要するに、パスパ文字はモンゴル語を表記するだけでなく、パスパ文字以外の文字で書かれた文書 (other scripts) を転写するために使用されるものであったということである。“譯寫”を“transcribe”と英訳し、その対象を“other scripts”とするところが示唆に富む。

3. 譯寫一切文字とは

さて、“譯寫一切文字”の“文字”は文字もしくは文章を指すが、ここでは文章即ち文書を指すとみて大過ない。“譯寫”の“譯”であるが、これは四方の異民族の言語を訳し伝えることを意味する。宋代に作られた民間類書『事林廣記』の元刊本には『蒙古譯語』(『至元譯語』ともいう)という漢語とモンゴル語の対応語彙集が増補されており、その序にあたる一文のなかで“譯”の義について言及する。それによると諸民族間の言語を通訳することを北方では“譯”というとのことである。「五方之民，言語不通，嗜欲不同。達其志，通其欲，東方曰寄，南方曰象，西方曰狄鞮，北方曰譯。譯者，謂辨其言語之異也。夫言語不相通，必有譯者以辨白之，然後可以達其志，通其欲」²。また、元の熊忠撰『古今韻會舉要』³は元代以前の字書・韻書の集大成ともいえるもので、『蒙古字韻』にもその書名が現われており(“古今韻會”とするが古今韻會舉要のことであろう)、元代におけるこの書の影響は小さくなかったと思われる。この書を見ると“譯”の義注として、先ず説文の「傳譯四夷之言者」を挙げ、次いで周禮の一文として、先に『蒙古譯語』で見た「東方曰寄，南方曰象，西方曰狄鞮，北方曰譯」を挙げる。いずれにしても、“譯”は自他異なるもの間での意思の疎通に関わる語として認識されていたはずである。したがって、モンゴルにとって自らの文字であるパスパ文字で、直接に自らの言語であるモンゴル語を書くことは“譯寫”には当たらない。“譯寫”の対象となる“一切文字”とは、四方の異民族(モンゴルからみて)の文字で書かれた文書を指すのであり、具体的には漢字漢文、ウイグル文字ウイグル語、チベット文字チベット語、デーバナーガリー文字サンスクリット語などとなる。これらの文書の文字をパスパ文字に移し替えて書き付けることが“譯寫”である。

² 元・至順年間(1330-1333)の椿莊書院刊本による。

³ 元・大徳元年(1297)成書。

ここで見逃してはならないことはウイグル文字で書かれたモンゴル語文書の扱いである。モンゴルにとってパスパ文字は自らのものであるけれども、ウイグル文字は本来は他者のものである。したがって、ウイグル文字モンゴル語文も“譯寫”の対象として数え上げなければならない。それでは、“譯寫”の対象とならないものは何か。それは文書として書き記されることのない言語である。当時、高麗はモンゴルの支配下にあったけれどもパスパ文字高麗語などという資料は発見されていない。高麗の正式な文書は漢字漢文であったから、高麗語をパスパ文字で書き表す余地はなかったのである。おそらく、今後もパスパ文字高麗語資料は発見されることはないであろう。

4. おわりに

以上を要するに、“譯寫一切文字”とは、第一義的には、パスパ文字以外の文字で書かれた諸文書をパスパ文字の文書に変換するということである。もっとも、パスパ文字に習熟した後には直接に周辺諸民族（モンゴルからみて）の言語を記す場合があったかもしれない。しかしながら、それは二義的なことである。なお、“一切文字”（諸文書）というのは文章上の表現であって、実際の対象としては漢字漢文とウイグル文字モンゴル語文ということになるのであろう。

参考文献〈発行年順〉

Poppe, N. 1957. *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J. R. Krueger, Wiesbaden.

羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字与元代漢語（資料彙編）』, 北京：科学出版社。

野上俊静 1978. 『元史積老伝の研究』, 京都：朋友書店。

照那斯図 1980. 「論八思巴字」, 『民族語文』 1980 年第 1 期, 37-43 頁。

照那斯図・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』, 北京：民族出版社。

姜信沆 1993. 『ハングルの成立と歴史』, 東京：大修館書店。

Coblin, W. South. 2007. *A Handbook of 'Phags-pa Chinese*, University of Hawai'i Press, Honolulu.